

平成 28 年 10 月 3 日

平成 28 年 10 月博士前期・後期課程入学式告辞

九州工業大学長 尾家祐二

ご入学おめでとうございます。

ここに入学式を挙げるにあたり、栄えあるこの日を迎えられました諸君に、心からお祝いを申し上げます。そして、これまでのご努力に敬意を表します。国立大学法人九州工業大学に諸君を迎えることができましたことは、この上ない喜びであります。教職員を代表してお祝い申し上げます。

なお、本日入学を許可された 63 名の諸君のうち、54 名、約 86% は、15ヶ国からの留学生の方達です。多くの国からたくさんの方が入学されることを、大変嬉しく思います。

最初に本学の歴史を簡単に紹介します。

これから諸君が学ばれる九州工業大学の前身は、1907 年に創設された私立明治専門学校です。創立者である安川敬一郎先生は、わが国の産業の礎となった北九州及び筑豊地域で様々な産業を興された経済界・産業界の重鎮です。安川先生は、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである。」という信念から巨額の私財を投じられ、我が国の産業の振興を支える技術者を育成する明治専門学校を創設されました。安川先生は明治専門学校の教育と研究を、東京帝国大学総長であられた山川健次郎先生に託されました。山川先生は、開校式において、明治専門学校を「技術ニ通ジテイルジェントルマンヲ養成スル学校デアル」と宣言され、品格と創造性をもつ人材を輩出することを目指されました。この山川先生の理念は、「技術に堪能なる士君子の養成」という本学の基本方針として、100 年以上の歴史を越えて脈々と伝えられ、現在に至っています。新入生の諸君は「技術に堪能なる士君子」という言葉をこの場で覚えて頂きたいと思います。

明治専門学校は、その後 1949 年に国立九州工業大学となり、2004 年から国立大学法人九州工業大学となりました。この間に、飯塚市に情報工学部が設置され、今年度 30 年目を迎え、若松の北九州学術研究都市に大学院生命体工学研究科が 16 年前に設置され、2 学部 3 学府・研究科、学生数約 5800 名を擁する、わが国有数の個性豊かな工学系大学となり、現在に至っています。

「技術に堪能なる士君子」という理念の下で育った諸先輩は、いずれの時代

でも産業界や学界で高く評価され、それぞれの分野で貢献してこられました。入学生の諸君は、100年以上も昔の言葉ということに違和感を抱かれるかもしれませんが。九州工業大学は、この言葉をそれぞれの時代に相応しい姿に解釈し、時代が求める人財を社会に輩出し続けてきました。そして、現在でも、質・量ともに、常に全国でトップレベルの就職実績を誇っています。これは、採用される企業等に、本学の教育および学習支援活動を高く評価して頂いている証であると思いますし、先輩諸氏が築いてこられた信頼の絆があればこそ、さらには信頼の基盤の上にもこそ実現できていることであると感謝しております。

それでは、ここで、これから学び続けるうえで大事なことについてお話したいと思います。大学では、様々な学習を通じて、高度な専門知識とスキルを獲得することは当然です。獲得した知識とスキルを活用することができる能力をコンピテンシー(competency)と呼びますが、九州工業大学では、高度専門技術者として活躍し続けるためのコンピテンシーと創造的な研究開発活動に必要な多様なものの捉え方、考え方を身につけることを重要視しています。

諸君が、グローバルな環境において卒業後も活躍し続けるために必要な能力、これをGCE(Global Competency for Engineer)と呼んでいます。本学ではGCEを5つの要素から成ると定義し、その涵養のための学習プログラムと学習環境を整備しています。その5つの要素とは、「多様な文化の受容」「コミュニケーション力」「自律的学習力」「課題発見・解決力」そして「デザイン力」です。これらは、今後学び続ける、成長し続けるうえでとても大事なものです。諸君は、大学における様々な学習機会および学習環境を活かして、これらを身につけてください。例えば、「多様な文化を受容」することは、学ぶ姿勢の原点でもあります。互いの違いを理解し合い、尊重することによって、お互いから多くのことを学ぶことができます。

そのために、本学では、チームによる学習を推進しています。チーム内の、それぞれの人の、ものの捉え方、考え方が異なりますし、行動も異なります。それは、それぞれの人が持っている知識やこれまでの経験によって影響されます。体系的な知識の他、経験によって得た、心に深く残る、切実な知識や五感で得た情報、感情によって、対象となる課題の捉え方が変わります。例えば、環境や高齢化等に関する諸問題について、体系的知識だけでなく、切実な知識、情報を持っている人と、そうでない人では、その問題の理解の仕方や、取り組む姿勢が異なってくる可能性があります。環境問題や高齢化問題が深刻な国に住む人、深く関係している人とそうでない人ではきっとそれぞれの問題の理解の仕方が異なるでしょう。したがって、チームで、課題解決に取り組むことは、

お互いに新たな知識を交換するばかりではなく、互いの考え方、理解の仕方が異なることを理解し、互いを尊重し、その考え方、理解の仕方を学ぶ、よい機会になります。そうすることによって、論理的思考、批判的思考と共に柔軟な思考が可能になり、多様な解を見つけ出すことに繋がります。

よい問いはよい解に繋がると言われています。よい見方、よい理解の仕方はよい問いを生み出し、さらには、それによってよい解を導いてください。

さて、今、課題解決の話をしました。課題を発見し、その課題を解決する姿勢だけでなく、大事な学びの原点は、他にもあります。それは、知的好奇心です。米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校のジャレド・ダイヤモンド(Jared Diamond)教授はその著「銃・病原菌・鉄(Guns, Germs, and Steel)」において、「実際の発明の多くは、人間の好奇心の産物」であり、「何か特定のものを作り出そうとして生み出されたわけではない」と述べています。そして、「発明をどのように応用するかは、発明がなされた後に考え出されている。」「しかも、数ある発明の中には、当初の目的とは全く別の用途で使用されるようになったものもある。飛行機や自動車をはじめとする、近代の主要な発明の多くはこの手の発明である。内燃機関、電球、蓄音機、トランジスタ。驚くべきことにこうしたものは、発明された当時、どういう目的で使ったらいかががよくわからなかった」と指摘しています。

知的好奇心から、学びが始まります。知識やスキルは、その好奇心、探求心が導いた学習の成果です。そして、それらが、課題発見や解決を可能にします。さらに、私たちは孤立した存在ではなく、様々なネットワークを持っており、その中の一員です。そのような文脈において、相互作用が生じ、互いに影響し合い、学びが進化していきます。様々な国の人達が、チーム内で、互いに影響し合って、成長することは掛け替えのない学習成果です。学生時代には、知的好奇心、探求心を持ち、様々な相互作用を通じて、多くのことを学んで欲しいと思います。

最後となりましたが、入学された諸君が、健康に十分留意され、様々な学習機会と環境を活用し、意義ある大学生活もしくは大学院生活を過ごされますよう重ねて希望致しまして、告辞と致します。本日は誠にありがとうございます。